

宗教教団の信仰継承の現代的課題

平良 直（倫理研究所特任研究員）

はじめに

どのような集団や共同体も次世代への知の継承があって、その安定・発展が確保されるということはいうまでもない。この場合の「知」とは、生業に関わる知識から共同体の慣習や規範をも含む社会生活を営むためのあらゆる知識を含み、また近代教育における知識までも含めることができる。集団や共同体は世代間の知の継承が断絶すれば、存続できなくなっていくといっても過言ではない。より正確に言えば、世代間の知の継承の断絶は、共同体と個人の紐帯や帰属意識の喪失をもたらすことになる。

上記のことは当然のことを大仰に述べているように受け止められるかもしれないが、現今の社会の様々なレベルでの変容を考慮するとき、集団や共同体が次世代に当該集団の安定や発展的展開をいかに託していくかということは重要な問題となってきている。少子化、価値観の一層の多様化、個人主義化などによって集団や共同体に人々を繋ぎとめ、維持発展させていくことはより難しくなっている。

宗教集団においてもこのことは同様である。ある宗教社会学者によると、戦後世界でさまざまに生じてきた新宗教教団が30年～40年という期間を経て教団の次世代継承のシステムがない場合、成員構成のアンバランスをもたらし、何らかの妥当な方策をとらないとおそらく教団が消滅するであろうことを、データを示しながら明らかにしている。数百年以上存続してきた伝統宗教家した宗教は、メンバーの高齢化の問題に対処できる制度的な仕組み、信仰継承の制度化等、が何らかの形で整えられてきているとみることができる。

戦後、多くの新宗教教団が形成され現代にいたっている。なかには世間にひろく認知されることのないような小さな教団も存在する。「宗教教団」という言葉を聞くと、なかにはすぐさまオウム真理教のような犯罪を行った集団を連想する人も少なくないであろう。日本のマスメディアが「宗教集団・教団」を取り上げる場合はネガティブな情報と抱き合わせて報じられることが少なくない。このような「宗教集団・教団」に関する情報の偏りは「宗教」へのイメージを否定的にとらえることと結びついているように思われるが、しかし、さまざまな日本の宗教教団が一定数の信者を抱え、その方々に日常を生きていくための倫理的規範を提供してきていることは明らかであるし、広い意味での社会的役割、公共的役割を担ってきていることは確かである。

少子高齢化など社会の変容に伴って、これらの新宗教教団が教団維持に不可欠な次世代への信仰継承にどのような対応が迫られているか考察するとともに、次世代育成を困難なものにしているいくつかの課題を考察してみたい。現段階ではいまだ現状の素描程度の提示しかできないが、今後の調査と考察を深化させていく嚆矢としたい。